

# 『「食」でつながるアフリカのコミュニティ —持続可能な地域の発展をかなえるための5つのヒント—』

伊藤 紀子 著

国際領域 上席主任研究官 飯田 恭子



## 1. 「食」とコミュニティ

アフリカの農村に足しげく通い、フィールド調査を続けてきた本書の著者は、住民との対話を通じて、「食」が人と人をつないでいることに気づきます。著者によると、アフリカのコミュニティでは、家族や親戚、友人といった人間関係の範囲を越えて、豊かな人が貧しい人に食料を与えます。それは、アフリカの人々の寛容さに基づく、日常的な暮らしの風景です。

著者によると、アフリカでは、食の欧米化が進みました。一方、女性は、家族の健康を大切にしていて、イモやトウモロコシ等を使った伝統料理を調理し、家族や隣人と一緒に食べることが多いそうです。食文化は、地域社会の歴史、自分のルーツ、民族やアイデンティティと関わる、と考えられています。食料を自給し、貧者に与え、平等に分かちあうこと、多様な食を楽しむこと、伝統的な食文化を継承することが、アフリカのコミュニティの特徴と、著者は考察しています。

## 2. 途上国における農業開発の比較

著者は、アフリカとインドネシアの農業開発と経済発展を比較しています。インドネシアでは、農業開発が経済成長を支えてきました。コメを例に見ると、収量を増やすために化学肥料が多用され、環境問題が生じました。その後、環境負荷の軽減に向けて有機農業が取り入れられると、農産物の輸出によって高収入を得る農家が現れました。一方、豊かな有機農家と、有機農業を始められなかった農家や土地を持たない人との間には、経済格差が広がりました。

アフリカでは、農業開発の遅れが、経済成長を妨げてきたと言われています。先進国は、アフリカに技術と資金を投入し、穀物の増産を促しました。その際、先進国は、アフリカの農家に「売るために食料をつくる」という意識を持つように勧めています。しかし、アフリカの農家は、収穫した農産物を販売すると、自分が食べたり、隣人に分けたりする

食料が減ると考えます。生産量が増えて豊かになった農家には、その多くを分配しなければならないという負い目も増えます。アフリカでは、農産物の生産量を増やしても、販売量の増加による農家の所得向上には直結しないことを、著者は観察しています。

しかしながら、今後、先進国の協力による農業開発が進み、アフリカの農家で「売るために食料をつくる」という意識改革も進むと、コミュニティにおける人と人のつながり、誰もが食料を確保できる安心、多様で伝統的な食文化が失われてしまうのではないかと、著者は懸念しています。

## 3. 自立的な地域の発展

著者は、アフリカの食とコミュニティの特徴を分析し、地域社会に豊かな人間関係を構築すること、食料を安定的に確保すること、文化を守ることが、重なりあって、自立的な地域の発展につながると考察しています。アフリカでも、与えてくれる人がいない、貧しい人もいます。そうした人を見つけ出し、支援を行う仕組みづくりについて、著者の関心は広がっています。

本書を読み、私はアフリカの人々の寛容さに基づいた豊かな暮らしに心をひかれました。アフリカのコミュニティが、一人一人の人生の変化をどのように受けとめて「与えたり」「与えられたり」しているかを、さらに詳しく知りたいと思いました。日本やドイツの農村における私自身の生活やフィールド調査を振り返り、与えられた多くの場面、与えてくれた方々を思い出す機会にもなりました。

本書は、学術研究の成果に基づいて執筆された、アフリカの農業と食料消費、農村社会に関する専門書です。優しく語りかけるような文体で書かれていて、図表はシンプルで、トピックごとに気軽に読めます。ぜひ、本書をご覧になってください。